The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ナシ（甚）型形容詞 ： 否定性接尾語を有する形容詞の考察
Author(s)	岩村, 恵美子
Citation	語文. 1995, 64, p. 12-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68879
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ナシ（甚）型形容詞

——否定性接尾語を有する形容詞の考察——

岩村　恵美子

一

〈—ナシ〉という形をとるク活用形容詞と言えば、まずアヤナシ・ココロナシ等、そのナシが文無シ・心無シというように〝無シ〟の意であると考えられるものが挙げられる。一方この他にも、ハシタナシ・ウシロメタナシ等、そのナシが〝無シ〟の意ではなく、一般に「（程度の）甚だしい意を表す」と言われるものが挙げられる。前者にみられるナシは当然形容詞ナシ（無）と考えられ、全体を複合形容詞とみるのが普通であるが、後者に見られるナシは、従来「（程度の）甚だしい意を表す」接尾語とされ、形容詞ナシ（無）とは殆ど無関係にとらえられてきた。小稿において、ナシ（甚）型形容詞と呼び、考察の対象とするのは、この後者の方である。

さて、このナシ（甚）型形容詞にはいかなる問題点があるのであろうか。まずは、同じように〈—ナシ〉というク活用形容詞をとりながら、形容詞ナシ（無）による複合形容詞ほどに、そのナシの素性が明確に説かれることがないという点が挙げられよう。先に触れたように、接尾語という見方はあるものの、例えばそれが何に由来するものなのか、或いは形容詞を形成する他の接尾語と突き合わせて見た場合に、それらと一括できるような同様の性質がそこに指摘できるのか、などの面で説得力をもった説明がなされておらず、よって不十分なとらえ方であるという感を免れない。そもそもナシ（甚）型形容詞に属する語は時代的に上代から近世にかけて幅広く見られるのに対し、それらを全体として見た上での整理がなされていないという点も問題である。やはりナシを説く上では、そういった整理が必要になってくるであろう。

ところがこのナシについて、これを積極的に形容詞ナシ（無）と関係付ける見方が近年提示された。[1] これはナシの由来を明確に説くものとして注目されるものと言える。ただしこの見方は、ナシ（甚）型形容詞におけるナシは〝無シ〟の意ではない、とした先の記述と相容れないものになり、おおいに疑問が残ろう。しかしながら、稿者は検討に値すべき見方であると考えている。というのも、ナシ（甚）型形容詞におけるナシを形容詞ナシ（無）と関係付けることには、またひとつ興味深い問題が窺えるからである。すなわち、何らかの物事を〝無し〟とする形容詞ナシ（無）は、日本語における否定表現の一端を担うものと言えようが、それがナシ（甚）型形容詞においては「（程度の）甚だしい意を表す」ものとして、否定で

はなくむしろ肯定表現に与かるのであるから、そこに、否定でありながら肯定を指向するという特殊な否定表現の一様相が見えてくるのである。これは否定表現の表現性というものを考える際に有意義な一視点をもたらすものではないかと思われる。

小稿では、以上のような観点に立ち、ナシ（甚）型形容詞におけるナシの解明に的を絞って考察を進めることとする。

二

ナシ（甚）型形容詞におけるナシについて、現行の主だった辞書は、そのどれもがこれを、ナシに上接する部分が表すところの状態が程度において甚だしい、乃至は、その状態を強調する、という意を表す接尾語としている。[2] ただし、それらの中には、ナシ（甚）型形容詞が形容詞ナシ（無）による複合形容詞――以下、ナシ（無）型形容詞と呼ぶ――に対して形態面において近似的な関係にある、と言及している辞書も見える。[3] が、そこでのナシ（無）型形容詞への触れ方には、両者の関係をそれ以上に見ることはなく、むしろ全く別物として考えるべきものとしている向きが窺える。他の辞書も併せ、それが現在のおおかたの見方であろう。つまり、問題のナシに関しては現象上の用法を説くのみにとどまっていると言える。

これに対し、最初に触れたように、ナシ（甚）型形容詞におけるナシを積極的に形容詞ナシ（無）と関係付ける論が、近年西宮一民氏によって提示された。[4] 西宮氏の説かれるところは以下の如くである。

形容詞ナシ（無）には「物事の非存在（……が無い）という意味と、事柄の内容の否定（打消）という意味」の二種があり、今問題としているナシは、後者、事柄の内容の否定の「特殊なものとして事柄の程度の否定（打消）の意味」であって、それは「その程度の極度性・抜群性を主情的に強調するもの」である――このところ、西宮氏は「……というものではない（テナモンジャナイ）」と解されており、例としてセハシ（忙）に対するセハシナシ（忙）を挙げておられる――。とすれば「元来は形容詞『無し』と同源の語であって、「事柄の程度の否定（打消）の意を表わす『なし』は、接尾語ではなくて、複合形容詞と考えねばならない。その意味では、物事の非存在の意味の『無し』、また事柄の内容の否定（打消）の意味の『なし』を後項に従えた複合形容詞となんら変わることはない。」

以上が西宮氏の論旨である。問題のナシに対するこのような、否定による程度強調、といったとらえ方は、殊更にナシ（甚）型形容詞について述べられたものではないが夙に「負相語」というものを説いた論に、同様のものが見られる。[5]「負相語」とは「意味的には正でありながら、形の上では否定（負）で表現せられる語」であり、提示者である泉井久之助氏は例としてメッソウ（滅相）に対するメッソウモナイ等を挙げておられ、「情緒の過度は単純な肯定形では表現しきれないのが、負相語の場合である。」とされている。「日本語のみならず、多くの言語には、その程度の積極的な過度をあらはすために、却て否定的な様相による表現の形式がある」と否定表現自体に焦点を当てて述べられる泉井氏であるが、同様のことは、「論理的には本來不可能なるべき肯定形と否定形とが同意味を表現すると云ふ事実」について、各国の言語にまで視野を広げて例をいくつも指摘された濱田敦氏の論にも既に窺われる。[6] 両氏の傾聴すべき論を考え併せれば、西宮氏の説は非常に説得性に富むものと思わ

れ、検討の対象に据えて、真に正鵠を射たものであるかを追究すべきものであると稿者は考える。[7] なお、先に触れた現行の諸辞書のなかには、西宮氏の説より後に刊行されたものもあるが、その説を採り入れてはいない。先に「現在のおおかたの見方」としたのはこの点を考慮してのことである。

三

ところでこれまでに、右以外にナシ（甚）型形容詞におけるナシについて具体的な説明を試みたものとしては、まず『大言海』[8]が挙げられる。そこには、

〔痛ノ略ナル、甚シニ通ズ〕他語ニ接シテ、接尾語ノ如ク用キル語。〈語例〉オヂナシ・ウシロメタナシ・イラナシ・アラケナシ・オボツカナシ・ハシタナシ

という記述が見られる。つまり問題のナシを、形容詞イタシの略形であるタシに「通ズ」るもの、と説くようにとらえられるが、これには従えるであろうか。

形容詞イタシが肉体的精神的な苦痛を表し、さらに主として連用形の形で程度の甚だしさをも表すものであることは、諸辞書にも記されるところである。また、コチタシ・ウレタシ等の語における〈―タシ〉は形容詞イタシに由来する、と見る見方もよくなされるところである。しかし、ナシがタシに「通ズ」るとは、どのようなことを言うのであろうか。意義的な近さの他には、仮にt子音とn子音の交替という観点から見るとしても、そのような例は、全く見られない訳ではないが、決して数は多くないようである。[9] さらに、〈―ナシ〉という形をとる語とコチタシ（言痛）・ウレタシ（慨）等の〈―タシ〉という形をとる語とにおいて、ナシ・タシの上接部が共通する語、などが見られる訳ではない。このように見てくると、『大言海』の説明は曖昧さを残すものであり、従うに足るものとは言い難い。

この他には、佐藤鶴吉氏の説が挙げられる。[10] 佐藤氏はミョウガナイ（冥加）・フテキナイ（不敵）等の例を挙げ、そのナイ（ナシ）を形容動詞の語尾「なる」の「な」から、形容詞の語尾「し」に類推して結成される「なし」

と見ておられる。なおこの見方は、金田一京助氏が『国語音韻論』[11]において、

黄色いといはずに、關西では黄ないといふ。無いではなく、これは、黄な（る）の意味で、形容動詞にして屬性をあらはす形をとり乍ら、澤山ある形容詞の語尾―いに類推して、黄ないとなつたのである。何ナイであって、無い意味でなく、却ってなるの意味である語尾は皆かうして出來たのであらう。（傍点ママ）

と述べられたことを参考にしてのものである。[12] しかし、『なる』から『なし』への類推、という説き方は、その類推の背景が今一つわかりにくく、安直で当座的な感を免れず、説得性に乏しい。ただし、同じように形容動詞語尾との関連性を説いたものに山田忠雄氏の説があり、そこではその関連の背景について言及されている。[13] よって、ここで山田氏の説を詳細に検討してみたい。

山田氏は形容詞・形容動詞間の、語幹を共通にした語尾の相互交渉について、近世元禄期あたりの、主に近松作品における例を挙げて述べておられるところで、まず「一般にナ語尾を使用してゐたにもかかはらず、特にイ語尾に活用せしめた例」として（オロカナリ

（愚）→）オロカシイ、（ムヤクナリ（無益）→）ムヤクシイ、（マッカナリ（真赤）→）マッカイ等の語を挙げられる。「ナ語尾」は形容動詞活用を、「イ語尾」は形容詞活用をそれぞれ表すものであるが、その後に、

これらの傾向は、さらにすすんでナ語尾のしたにさらにイ語尾を添加する現象となってあらはれる。

と述べられ、その語例として、ムゲナイ（酷）を挙げられる。そして続けて、

勿論、みぎの諸例を馴致した原因については、従来アラケナシ、カタジケナシのナシに対する類推ととくむきがおほいが、ムゲにムゲナ、ムゲニの用例のおほいところをみると、わたくしのかかげた理由も無下にしりぞくべきではない。（傍点ママ）

と述べておられるのである。つまり、形容詞・形容動詞間の語尾交渉を背景として、ナシ（甚）型形容詞の形成のあり方を説かれるのである。

さて、形容詞・形容動詞の意義の近さから考えて、両者間で語幹を共有するものが出てくるのは、実際に用例がいくつも見られることでもあり、首肯できるところである。しかし、語尾までをとりこんで新たな活用を生むことが一般的にあったと考えることは妥当であろうか。例えば山田氏の挙げるマッカイという形容詞は、これ自身が語幹となってマッカイナ、マッカイニの形――つまり形容動詞活用――で用いられることも多いようであるが、このマッカイナは語尾を含んだ形容詞が形容動詞語幹となった〈マッカ＝イ＋ナ語尾〉形である。それは丁度、ムゲナイを、語尾を含んだ形容動詞が形容詞語幹となった〈ムゲ＝ナ＋イ語尾〉形と見た場合に、これと対応的な例とも見られるものである。山田氏はこれについて、

元来マッカナといふことばのナ語尾が一往イ語尾に転じたのち、近松の言語意識においてマッカイ自体が名詞的なものにうけとられ、それにさらにナがついたかたちかとおもはれる。

と述べられている。マッカイの形容動詞語幹化の契機を〝名詞的把握〟に認める点は首肯できるところがあるが、それは、マッカイナが赤という色彩を表す語であることを考えると、他の基本的な色彩語であるシロ・クロ・アオが接頭語マを冠して形容動詞活用する場合、それぞれマッシロ・マックロ・マッサオと、語幹が四音節となることへの類推がはたらいているからではないかと思われる。そのような要因が考えられるとすれば、マッカイナは単純に〈形容詞語幹＝イ＋ナ語尾〉形とは言えなくなり、〈形容動詞語幹＝ナ＋イ語尾〉形は対応例を欠くことになる。山田氏はまたマッカイナと同類の語としてスシナ（酸）という語を挙げられるが、これは形容詞スシ（酸）との直接的関係はないもののようである。[14]

また、金田一氏が挙げられたキナイ（黄）という方言の例は、〈ムゲ＝ナ＋イ語尾〉形になぞらえられるものかもしれない。そしてそこにはさらにケナリイ・ケナルイ（異）という語も加えられるかと思われる。さてこのキナイ及びケナリイ（ケナルイ）には共通点があり、それは、もともとの活用における語幹が一音節であるということである。語幹が一音節のものは、二音節以上のものに比べて語の識別等において安定性を欠くと思われるが、そこに、語義の中核である語幹の保存安定意識がはたらき、語尾を伴った形をとりこんで、形容詞・形容動詞間で活用が渡り合うことになった、というような要因が考えられるのではないかと思われる。とすれば、

〈形容詞語幹＝イ＋ナ語尾〉形や〈形容動詞＝ナ＋イ語尾〉形ではないかと見られた語はすべてそうなる要因が考えられるものと言え、むしろそのような形は原則的に認められないとしたときの、理由のあるわずかな例外として処理できるということになってくるであろう。よってここに、山田氏の説は退けたく思う。[15]

このように見てくると、結局『大言海』および佐藤氏、山田氏の説は、いずれも西宮氏の説に比して説得力をもったものとは言い難いということになるであろう。

四

一方、西宮氏の説に対して疑問を提示したものに、山口佳紀氏の論がある。[16] 山口氏は上代に見られるナシ（甚）型形容詞を取り上げ、「このナシが形容詞ナシであれば、上に来るのが名詞の場合は、否定ではなく、非存在の意になる。また、否定の意になるのは、上に形容詞連用形、副詞、名詞＋ニなどが来た場合であり、従ってナシ（甚）型形容詞と見られる語はそのような構成ではないので、そのナシは否定の意のナシとは考えにくい、とされるものであり、ナシ（甚）と形容詞ナシの（無）の同源を認めないのである。山口氏の論は、形容詞ナシ（無）における非存在と否定の形態上のパターンについて言及している点で論理的であるかと思われる。よって山口氏の論は、西宮氏の説とともに検討の対象に据えて見る必要があろう。なお山口氏自身は問題のナシについて、そのナは「情態言を作る接尾辞のナであろう」と説いておられる。

ここで両者の是非を検討するにあたり、ナシ（甚）型形容詞と呼び得る語にはどのようなものがあるのか、語例を挙げてその傾向を見ておくべきであろう。ナシ（甚）形容詞は上代から近世にかけて幅広く見られるのであるが、ここにはその典型として、中古における語例を別表Ⅰに示すことにする。なお作表にあたっては、語の性質をとらえやすくするために、語義や、ナシの上接部の意味を裏付ける語――これを対応語と呼ぶことにする――を併せて示し、またその対応語の品詞的性質による分類を施しておく。

個々の語の詳細な検討は今措くこととして、このナシ（甚）型形容詞の形態的なありようをおおまかにとらえるならば、その上接部は形容動詞語幹や形容詞語幹、或いは情態を表す語基というように、情態を表す要素ばかりである。分類には他に「ケによる」ものがあるが、これは上接部のうちケを除いた部分が対応語をもつと考えられる語である。このケはおそらく、情態を表す語基に接してその情態的意義を定着させる接尾語ではないかと考えられる。結局上接部にくるものは、いずれも単語として機能するには何らかの語尾をとらねばならないような、独立的ではないものばかりであると言える。もっとも「ケによる」とした分類項の下位分類に「動詞」としたものもあり、これは上接部がクで終わる下二段動詞の活用形に相当するが、〈―ケ〉という形をとることがナシ型形容詞となる要因であると考えられるものである。

さて西宮氏は、問題のナシは形容詞ナシ（無）の「事柄の内容の否定の意味」の特殊なもの、と述べられているが、西宮氏の挙げられた〝否定〟の例は、「惜しけくもなし」（雄略紀）、「絶ゆることなく」（万葉集）、「深くもなかりしか」（源氏物語）、「ここにつかはる人にもなきに」（竹取物語）である。これらの例はたしかに事柄の否定の意を表しているが、このうち第三・四例は、形容詞の連用

形や断定の助動詞ナリの連用形をうける形容詞ナシ（無）の、いわゆる補助用言としての用法である。これを、〝非存在〟の意のナシ（無）型形容詞などと同じように「複合形容詞」とされるのは適当ではないだろう。それは形容詞のク語法をうける第一例や形式名詞コトをうける第二例についても言えることである。むしろ一語意識でとらえ得る〝否定〟の意のナシ（無）型形容詞と言えば、数は僅少であるが、サナシ・ワザトナシといった、副詞を上接部にとるものが考えられる。もっともサナシは、補助用語ナシの上接部にくる形容詞連用形等を指示語サ（然）で置き換えたものとも言える。なお、形容詞ナシ（無）が補助用語として〝否定〟の意で用いられるのは院政期以降に活発になることのようであるが、西宮氏の挙例にもあるようにそれ以前にも見られるものである。上代では主に助詞トを承ける場合に顕著である（「時となく思ひ渡れば生けりともなし〈生跡文奈思〉」万葉・三〇六〇）が、先の例のような形容詞のク語法を承ける場合にも、〝非存在〟の意を残すとは言えやはりその形容詞の意義を否定しているものととらえられる。中古に入ると副詞サや形容詞連用形を承ける例も現れるようになるが、ナシによる否定は、一方で否定表現に与かるアラズに比べてより口語寄りの言い方であったようである。[17] ともあれ形容詞ナシは上代から〝否定〟を表す用法を備えていたと言うことができよう。

では、ここでナシ（無）型形容詞の形態的なありようも見ておくことにする。今、『日本国語大辞典』の見出し語を対象としてこれを拾うと、ナシ（無）型形容詞におけるナシの上接部はほぼ名詞として一括できるものであることがわかる。またナシと上接部とが主述関係をなしているのが明白に見てとれる。別表Ⅱに上代・中古の例を挙げておくが、中世以降もこれに漢語名詞が加わるくらいで、おおかたの傾向に変化は見られない。

ところで別表Ⅱに挙げたものの中に、「接尾語ゲによる」としたものがあるのは多少説明を要するかもしれない。接尾語ゲには形容動詞語幹をつくるはたらきがあり、とくに形容詞語幹と結び付く場合に活発である。とするとヒトゲ・モノゲ・ニゲはよいとして、形容動詞語幹となるキタナゲ・タノモシゲ・ヲシゲは、ナシ（甚）型形容詞の上接部と品詞的性質において重なってくる。しかしながらここに見える語は、たとえば「たのもしげある木」（源氏物語）という例を有するように、ヒトゲ等と同様に名詞と見てよいものと言える。結局、ナシ（甚）型形容詞とナシ（無）型形容詞とは形態上明らかにその上接部の様相を異にする、と言えよう。

再び西宮氏の説を振り返ると、先に引用した論述の最後にあるとおり西宮氏は、ナシ（甚）型形容詞はナシ（無）型形容詞や形容詞ナシ（無）の補助用言用法と「複合形容詞」として「なんら変わることはない」とされ、さらに続けて「結局、『無し・なし・（問題のナシ（甚）を指す――注記岩村）』を含む複合形容詞の一つ一つについて、その三つの意味を考えていくよりほかないということになる。」と言われ、ナシ（甚）型形容詞であることの判定を専ら上接部の意義の面から論証しておられる。しかしそれはいささか性急な論であり、上記三者の形態的な面として上接部の品詞的性質に注意すれば、形容詞ナシ（無）と関係付けるにあたっても、

――名詞（居体言を含む）　→非存在のナシ（無）型形容詞のナシ

形容詞ナシ──┬──形容詞連用形
　　└──（形容詞活用の助動詞連用形）→否定の補助用言の断定の助動詞ナリの連用形　　ナシ
　　┬──形容動詞・形容詞語幹等　　→否定（程度強調）
　　└──情態を表す独立的でない要素　　のナシ（甚）型
　　形容詞のナシ

というような説明が可能になってくるのではないかと思われる。こういったパターンへの配慮という点で、山口氏の疑問提示はもっともな指摘であると思われる。ただし山口氏はナシ（甚）と形容詞ナシ（無）の同源を認めてはおられない。ではナシ（甚）に対する山口氏自身の説はいかに見るべきか、ここで検討しておきたい。その説とは、先に触れたとおり、ナシ（甚）を「情態言を作る接尾辞のナ」＋シ、とされるものであるが、山口氏はこれを、形容詞語幹部が「単一の語基でなく、それに接尾辞が付加されているもの」で、ク活用のもの、のうちに数えて述べておられる。そこには語例としてイブセシ・シコメシ・ミジカシ等が挙がっており、それぞれに対し「イブ＋サ＋i」「シコ＋マ＋i」「ミジ＋カ」という分析を施されているが、この中のサ・マ・カが「情態言を作る接尾辞」にあたり、「i」は「独立化の語尾」とされる。[18] 問題のナシはこれらについての記述の後に「別の一類として」挙げるものの、「これらのナは、やはり情態言を作る接尾辞のナであろう」とされる。しかしサ・マ・カはそれぞれ「〜サニ」「〜マニ」「〜カニ」の形で情態を表す副詞として用いられることもあるのに対し、ナはそのような用法をもたず、従って同じように「情態言を作る接尾辞」と見なせるのか、疑問が残る。なおアマネシという例をイブセシ等とともに挙げ、「アマ＋ナ＋i」と分析されてやはり「情態言を作る接尾辞」のナを想定されているが、問題のナシを「別の一類として」挙げられるところを見ると、必ずしもそれと同じものとは見ておられないようである。アマネシに見るナは「独立化の語尾i」をとり、問題のナシのナはこれをとらないという相違点も気になるところであり、[19] 結局山口氏の説は全体として従うに足る説得性をもったものとは言い難い。

五

ここに至って、ナシ（甚）型形容詞におけるナシは、焦点を否定のもつ表現性そのものに当てて考える必要があるのではないかと思われる。先にナシ（甚）型形容詞、ナシ（無）型形容詞、補助用言にたつ形容詞ナシ（無）の三者を各々のナシの上接部に注目しつつ形容詞ナシ（無）と関係付けて見たが、今一度そこに立ち返って考えてみたい。上記三者のうち、形容詞連用形を承ける補助用言法の形容詞ナシ（無）とナシ（甚）型形容詞とは、ともに意義上は情態を表す要素が上接部にくる点で共通する。この点で、西宮氏のようにナシ（甚）型形容詞のナシを「事柄の程度の否定」にたつ形容詞ナシ（無）と見ることは、形容詞ナシ（無）が情態を表す要素を承けるときには〝否定〟の意になる、という一貫したことが言えることになる。もちろん意義上は共通すると言っても、山口氏も指摘されるように、形態上は語尾の有無という相違があり、その相違は、結果的に両者の目指す表現上の相違となって表れている。すなわち、補助用語のナシは情態をまさしく否定し、他方ナシ（甚）型形容詞

のナシは情態を強調する。この相違は両者のつながりを断ってしまうものであろうか。

そこで、今やほぼ自明の理と言い得ることでもあろうが、〃否定〃とは、特定概念を排除するのみで、それ自身は特定概念を指示し得ないものであることを思い出したい。たとえば、「この部屋は暑くない」と言ったところで、それがそのまま、その部屋が寒い、或いは涼しい、或いは暖かい等といったことを意味していることにはならない、ということである。それが発せられた状況如何で、否定表現の結果が目指すところの意味は変わってくると言えよう。とすれば、ここにひとつの状況として、「暑い部屋だけど、入ってくれ」と言われてその部屋に入った時などを想定すると、「この部屋は暑いなんてものじゃないよ」という否定表現が、非常に暑い、という意味において成立することもあり得る。後者の場合は、否定によって指向される表現の方向が、前者の寒い・涼しい・暖かい等の場合とは正反対であり、仮にこの前者を負方向への否定とすれば、後者は正方向への否定と言える。そして後者は、「暑い」という語のもつ意義を正方向に向かって強調するという点で、むしろ〃肯定〃的でさえあると言える側面をもっている。このような、否定した結果残るところとしての〃否定〃の表現性、への言及は、これまでにもなされることがあったものであり、[20]〃否定〃というものを考えるにあたって非常に重要な視点であると言える。

今、ナシ（甚）型形容詞のナシを形容詞ナシ（無）の否定用法の一つととらえ、右に見た〃否定〃の表現性を踏まえて言えば、このナシは正方向への否定であり、補助用言のナシは負方向への否定である、と説明できよう。そしてその相違は、上接部において形態的に定まった傾向が存することと呼応することになる。このように考えてくると、両者の共通点を重んじて、ナシ（甚）型形容詞のナシはやはり〃否定〃に与かるものととらえて良いと思われ、両者の間にあった表現性の相違も、両者のつながりを断ってしまうものではなく、むしろ否定表現の本質にかなったものと言えるのではないかと思われる。

次に、では上接部の形態上の相違と表現性の相違とは、どのように関係すると言えるのか、なぜ情態を表す独立的でない要素が上接部にくるナシ（甚）型形容詞は、単なる否定にとどまらず、程度強調という肯定的とも言える表現性をもつのか、この点について考えてみたい。先に見たとおり、ナシ（甚）型形容詞のナシと補助用言のナシとはともに形容詞や形容動詞等を上接部に戴く。一般に形容詞や形容動詞は、性質・情態を表す語であるとされるが、正確に言えば、性質・情態を表す、乃至性質・情態への名付け、といった意義と、その性質・情態がある、乃至或るものがその性質・情態を有する、といった叙述性との結合したものである。そして意義は語幹が、叙述性は語尾が、それぞれ受け持つものであろう。とすれば語尾を伴った形に接する補助用言のナシは、〃情態がある〃に対して〃情態がない〃とする負方向の否定となり、語幹に直に接して全体を形容詞化するナシ（甚）型形容詞のナシはそれとは別に、語幹の情態的意義そのものに対しての、「〜とはもはや言えないくらいに〜」というような正方向の否定となり、[21]結果的には程度強調の表現をなすことになると言えるのではないか。そして、このナシはもともと形容詞ナシ（無）に由来するものであるが、複合語というには独立的でない要素に接することでもあり、又用いられていく過程で

程度強調の意義用法が固定して、むしろ接尾語的な性格をもったものとして、以後造語力を発揮していくものと思われる。[22]

六

さて稿者が以上のように考えるのは、否定が結果的にいわば肯定を指向する表現性をもち得ることは、ひとりナシ（甚）型形容詞にとどまらず、他の形式――殊に形容詞化接尾語――においても認め得るとしていることに拠るものである。

（イ）み吉野の　耳我の山に　時じくぞ＜時自久曽＞雪は降るといふ　間無くそ　雨は零るといふ　その雪の　時じきが如＜不時如＞　その雨の　間なきが如　限もおちず　思ひつつぞ来しその山道を　（万葉・二六）

（ロ）立ち別れ　君がいまさば　磯城島の　人は吾じく＜人者和礼自久＞　斎ひて待たむ　（万葉・四二八〇）

上代には右に挙げたようにトキジ・ワレジ等シク（ジク）活用する形容詞とみられる語がある。これらの語におけるジが否定の意をもち、体言を上接部にとり全体を形容詞化する接尾語としてとらえられることは、『古語大辞典』にも説明が見られるところであり、現在ほぼ浸透している見方と言えよう。[23] 終止形語尾がジとなるこのような形容詞――これをジ型形容詞と呼ぶことにする――には、シシジモノ・ウマジモノ等＜～ジモノ＞型をとる語もこれに含めて考えられる。

（ハ）石の上　布留の尊は　た弱女の　惑ひに依りて　馬じもの＜馬自物＞　縄取り付け　鹿猪じもの＜肉自物＞　弓矢囲みて　大君の　命恐み　天離る　夷辺に退る　古衣　又打の山ゆ　還り来ぬかも　（万葉・一〇一九）

このジが否定の意をもつことは、形態上ほぼ同一である打消推量の助動詞ジと、否定（打消）という意義面での共通性に裏打ちされるものである。むろん両者は文法的構能において異なるものであるが、たとえば同じように否定の意をもつ辞的成分に助動詞ズがあり、助動詞ジとともにこれも濁音である点を鑑みると、問題の形容詞語尾ジにも否定の意を認めることは十分に理由のあることと思われる。

さて右に上げたようなジ型形容詞の例は、上接部をAとすると「Aではないが Aのように」という意味を表し、否定の結果が肯定的な比喩・比況の表現に結び付いている。比喩・比況は本来否定性と肯定性とを併せもつことを基本的性格としており、これを否定表現でもって表すことは殊更稀という訳ではなく、たとえば上代でも助動詞ズのク語法とされる＜ナク＞を用いた＜～ナクニ＞型の表現において見られる。

（ニ）かくしてや　なほや守らむ　大荒木の　浮田の社の　標にあらなくに＜標尓不有尓＞　（万葉・二八三九）

（ホ）吾妹子を　外のみや見む　越の海の　子難の海の　島ならなくに＜嶋楢名君＞　（万葉・三一六六）

これらは単なる否定に終わらず、「～でない（のに）」と否定される対象が逆に現実の様態をさながらに暗示していると見られるものである。すなわち隠喩であり、先に見たジ型形容詞におけるジのはたらきも同じく隠喩と言える。

右にはジ型形容詞において、ジによる否定が様態の比況にはたらくことを見たが、同様には解することができない次のような例もある。

（ヘ）……朋神の 貴き山の 並立ちの 見が欲し山と 神代より
人の言ひ継ぎ 国見する 筑羽の山を 冬ごもり 時じき時と
〈時敷時跡〉 見ずて行かば まして恋しみ 雪消する 山道
すらを なづみぞわが来る　（万葉・三八二）

（ト）……吾妹子が 形見に置ける みどり児の 乞ひ泣くごとに
取り与ふ 物し無ければ 男じもの〈鳥徳児物〉 腋はさみ
持ち……　（万葉・二一〇）

これらの例は特に比況として肯定を指向せず、むしろ否定のみで考えられるものである。ジ型形容詞のジが否定の意をもつことを、これらが証明しているとも思われる。ただし先のような例と今のような例とで意味するところが必ずしも一致しないことになるが、〝否定〟は特定概念を指示し得ない、という点を踏まえれば、とりあえず納得できるところかと思われる。が、しかし同一の表現形式でありながらそのような相違が生じるのは、やはり何らかの説明が要されるのではないか。そこで先と今の例における否定のあり方を、文脈や上接部に注意して見比べてみると、（ト）の例で言えば、その歌は人間の男を詠んで、男でないとするのであり、それに対して（ヘ）の例で言えば、その歌は人間を詠んで、馬・ししでないとするものである。人間が馬・ししでないのは当然のことであって、その当然の否定的事実をあえて提示するところに比況を成立させる素地ができ、馬・ししでない人間がその様態においてさながら馬・ししでないことを暗示するのだ、と言えるのではなかろうか。つまり場面や文脈がその意味の成立を裏から支えているものと思われるのである。そして、場面や文脈への理解が発話対象に十分期待できるという素地があってのものと考えられる点は、多かれ少なかれナシ（甚）型形容詞にもあてはまることと思われる。

以上、上代のジ型形容詞は、そのジが否定の意をもち、具体性の強い体言を上接部にとって、多くの場合様態の比況を表して肯定を指向するものであると言えることを見た。その肯定指向性をもって、ナシ（甚）型形容詞とこれを統一的にとらえたいと稿者は思うのである。副題に掲げた否定性接尾語を有する形容詞とは、このようにとらえることによって括った両者を指しての謂である。これは、かつて語構成上充分に説かれることのなかったナシ（甚）型形容詞に対して適当な説明を施し、その上で、関係付けてとらえられることのなかったジ型形容詞とこれとを併せ考えることにより、両者の形容詞としての的確な位置付けを試みようとしてのことである。両者はそれぞれジ・ナシという要素が否定の意をもつものであり、否定の側から言えば、その表現性の一つであるところの、結果的に肯定を指向する用法が、形容詞化接尾語となって表れたものと考えられるのである。

七

以上、ナシ（甚）型形容詞の問題点であった語末のナシについて考察を加えてきた。ここで考察の内容をまとめるならば、そのナシは形容詞ナシ（無）に由来する否定の意をもったものと解すべきであること、そして、否定の意をもつ形容詞化接尾語ということで上代のジ型形容詞における語末のジと統一的にとらえられ、ナシ（甚）型形容詞とジ型形容詞とは否定性接尾語を有する形容詞という位置付けが可能であること、ということを述べたものである。

なお、問題のナシを形容詞ナシ（無）に由来するものと見ること

については西宮氏の説を承ける形となった訳であるが、西宮氏の説には訂正及び補足すべき点が少なくなかった。問題のナシについて述べるのであれば、そのナシを含むナシ（甚）型形容詞の形態面としての語構成への検討も徹底すべきものであると思われるが、西宮氏の説にはそれが十分には窺えなかった。西宮氏が取り上げられたナシ（甚）型形容詞の実際の語例は、それまでに報告されている（「これまでに挙げられている」と御論文にある）という室町期以前の二十数語であり、その検討は各語の意義面のみからなされたものである。しかしながらナシ（甚）型形容詞は、時代的に上代から近世にかけて幅広く見られるものであり、これらの語の構成を見ることがすなわち問題のナシの性格を確かめることになると言えるだろう。稿者には、各時代に見えるナシ（甚）型形容詞に対する考察結果の準備もあるが、ここではひとまずそのナシの考察に絞って述べることとした。

注

（1）西宮一民氏「いわゆる『甚し』について」（『論集日本文学・日本語』1上代 '78・3）

（2）『日本国語大辞典』15（小学館・'75刊）、『岩波古語辞典』（岩波書店・'74刊）、『古語大辞典』（小学館・'82刊）など。また、「形容詞語尾」としつつ同様の説明を施している『時代別国語大辞典上代編』（三省堂・'67刊）も、これらに準じてとらえられよう。

（3）『古語大辞典』に「これらの語の中には、同音の形容詞『無し』と混同され、否定的な意に解されてきているものもある。」（語誌の欄）とあり、『時代別国語大辞典上代編』に「ナシが無しと解されて、〜が無いさまの意に用いられたとみるべきものもある。【考】同じような語構成の語に、ココロナシ・コトナシ・スベナシのように名詞と無シとの複合形容詞がある。」とある。

（4）注（1）論文。

（5）泉井久之助氏「否定表現の原理」（「国語国文」22—8 '53・8）

（6）「肯定と否定——うちとそと——」（「国語学」1 '48・10）

（7）なお西宮氏のようなとらえ方は、断片的なものではあるが、夙に方言の考察でセハシナイを取り上げられた前田勇氏『大阪弁の研究』（'49・8）などにも見られるものである。ちなみに前田氏はセハシナイに対して次のように述べておられる—「この『ない』もやはり『無い』なのではないか。すなはち『せはし』（忙）では表はし足りない氣持、これ以上の忙しさは無いと云ふ感情が『せはしない』の表現を呼んだのである。」

（8）冨山房・'34刊。

（9）山口佳紀氏『古代日本語文法の成立の研究』（'85・1）を参考。

（10）「『なし』を接辭とする形容詞について」（「国語国文」3—5 '33・5）

（11）刀江書院・'31刊。

（12）佐藤氏はナシ（甚）型形容詞の形成について、

この「なし」は、一般的に言へば、その原義がどうであらうが、それには頓着されることなく、すでに形容詞の造語成分として遊離したもののやうに思ひなされ、又、その語幹たるべき語の本質如何も嚴密には顧みられることなく、即ち單純な類推に依つて、自由に他の語に膠着せしめて用ひられるに至つたのであらうと思はれる。（傍点ママ）

と述べられ、ナシが形容動詞語幹以外に付く場合に対処されているが、形成の主流とされた「類推」の元となる見方に説得性がないので、結局ナシ（甚）について根本的に解き明かす論とは言えない。

（13）「形容詞スルドシの成立」（「日本大学研究年報」4 '54・3）

（14）『古語大辞典』「すし〔名・形動ナリ活〕」語誌の欄を参考。

（15）抄物に見えるセチベンナイ・セジナイ・セマジナイについて、柳田征司は山田氏の説を承けて説明されている——「活用から見た抄物の語彙」（「愛媛大学教育学部紀要」Ⅱ・5・1 '73・2）——が、稿者は当然これも退けたく思う。

（16）注（9）書、第二章第二節。

（17）小林賢次氏「否定表現の変遷——『あらず』から『なし』への交替現象について——」（「国語学」75 '68・12）

(18) 「ミジ＋カ」のみiをとらないが、一応iをとった形に相当する〝ミジケシ〟の例は名義抄（観智院本）に見える。

(19) この点に関し、山口氏は「（問題のナシの）ナは安定性が強いらしく」と述べておられる。これは、氏が語幹部の安定度が高いものは「独立化の語尾を必要としなかったものと考えられる」とされていることによる推論である。

(20) 注(4)論文や、鈴木一彦氏「打ち消して残るところ――否定表現の結果」（『国語学』50 '62・9）等が挙げられる。

(21) 「……というものではない」や「……どころではない」という言い方にしても、情態的意義そのものを抽出していることが窺われる。

(22) 接尾語化する形容詞の他例には、一般にカタシ・ニクシ等が挙げられる。

(23) この見方の提唱者は橋本四郎氏である。――「上代の形容詞語尾ジについて」（『万葉』15 '55・4）。ちなみに稿者は、形容詞オナジのジも同様にとらえられることについて述べたことがある――「いわゆる形容動詞『おなじだ』について――その成立の過程を考える――」（『叙説』17 '90・10）。

――富山県立雄峰高校教諭――

表Ⅰ　中古に見える（ナシ）甚型形容詞

分類	語基	語例	語義	対応語
形容動詞語幹	ウツナシ〈紀図本〉	必・確実だ	ウツー（全）	
	アラタナシ〈詞花〉	新	アラタ〈万葉〉	
	コトナシ〈詮子合〉	殊・格別だ	コト〈宇津保〉	
	タシナシ〈地十経〉	苦しく辛い	タシ〈記歌謡〉	
	ハシタナシ〈伊勢〉	中途半端	ハシタ〈土左〉	
	ユクリナシ〈土左〉	突然・不意だ	ユクリ〈紀前本〉	
	ムベナシ〈蜻蛉〉	諾・もっともだ	ムベ〈古今〉〈ウベ〈万葉〉	
	オボロケナシ〈宇津保〉	並々ならず	オボロケ〈蜻蛉〉	
ケによる 語基＋ケ（キ）	イトキナシ〈三蔵〉 イトケナシ〈浜松〉	幼	イトコ〈記神代〉	
	オホケナシ〈宇津保〉	身の程弁えず	オホナオホオ〈蜻蛉〉	
	シドケナシ〈宇津保〉	くつろいだ・乱	シドロモドロ〈宇津保〉	
ケによる 動詞	イワケナシ〈落窪〉	稚・子供っぽい	イワク（下二段）〈竹取〉	
	オホドケナシ〈栄花〉	おっとりした様	オホドク（下二段）〈源氏〉	
形幹	ウシロメタナシ〈落窪〉	気掛かり・不安	ウシロメタシ〈古今〉	

＊対応語欄は、形容動詞は語幹で示す。〈　〉内出典は、なるべく初出のものを挙げるようにした。

＊「形幹」……形容詞語幹

〈紀図本〉＝日本書紀図書寮本訓　〈詞花〉＝詞花集　〈万葉〉＝万葉集　〈詮子合〉＝寛和二年皇太后詮子瞿麦合　〈宇津保〉＝宇津保物語
〈地十経〉＝地蔵十輪経元慶七年点　〈伊勢〉＝伊勢物語　〈土左〉＝土左日記　〈紀前本〉＝日本書紀前田本訓　〈蜻蛉〉＝蜻蛉日記
〈古今〉＝古今集　〈三蔵〉＝大唐玄奘三蔵法師表啓古点　〈浜松〉＝浜松中納言物語　〈落窪〉＝落窪物語　〈竹取〉＝竹取物語　〈栄花〉＝栄花物語
〈源氏〉＝源氏物語

表Ⅱ　ナシ（無）型形容詞の上接部（上代・中古）

名詞	居体言	複合名詞	接尾語ゲによる	
アヤ(文) イトマ(暇) ウラ(心) カタ(形) ココロ(心) コト(事) コトハリ(理) ツツミ(恙) マ(間) キヤ(礼) ツネ(常) トキ(時) ヲサ(長)／オモ(面) カゲ(影) カミ(上) クマ(隈) ココチ(心地) シナ(階) スエ(末) チカラ(力) ツツガ(恙) ツミ(罪) トコロ(所) ナゴリ(余波) ナサケ(情) ハカ(果) ホド(程) ヨシ(由) ワリ(理) コチ(骨) サウ(双) ビン(便) ホイ(本) メンボク(面目) ヤク(益) ヨウ(要) ロン(論)	カギリ(限) コトハリ(理) ツツミ(恙) ツレ(連)／アヘ(敢) オボエ(覚) オモヒ(思) カクレ(隠) カヒ(効) コモリ(隠) サダメ(定) タグヒ(類) タノミ(頼) タヨリ(頼) ツキ(付)—ココロヅキ(心付) タヅキ(手付)— ツツミ(慎) ナラビ(並) ノコリ(残) ハカリ(計) ハヂ(恥) ヘダテ(隔) マギレ(紛) ユルシ(許) ヲヤミ(小止)	△語＋名▽／シヅゴコロ(静心) △名＋名▽／アトカタ(跡形) アトハカ(跡果) カタハラ(傍) ソコヒ(底辺) ナニゴコロ(何心) △居＋名▽／オモヒグマ(思隈) タエマ(絶間) ヨリドコロ(拠所) △動＋名▽ユクヘ(行方)／イフカタ(言方) イフカヒ(言効) イフヨシ(言由) センカタ(為方) センスベ(為術) ミルメ(見目) ヤルカタ(遣方) ヤムゴト(止事) ユクカタ(行方) ワクカタ(分方)	△形＋▽	／キタナゲ(汚) タノモシゲ(頼) ヲシゲ(惜) サリゲ(然)
			△名＋▽	／ヒトゲ(人) モノゲ(物)
			△居＋▽	／ニゲ(似)

＊／以下は中古の語例。
また表中、
語基＝「語」、名詞＝「名」、居体言＝「居」、
動詞＝「動」、形容詞・形容詞相当の語＝
「形」と略記している。